

ちちぶ俳句サミットin皆野

特別展示「俳句のまち皆野」俳句文化を築いた先人達の記録」
直筆の掛軸や短冊など、貴重な品を約50点展示しました。



12月1日(土)～15日(土)文化会館において、「ちちぶ俳句サミットin皆野」が開催されました。
秩父全域から289句の応募があった俳句作品展示や、ご家庭で大切に受け継がれてきた、町の俳句文化にゆかりのある作品を展示しました。

俳句応募作品選考結果 夏井いつき 選

特選

牛蒡ごぼう掘る両神山へ尻立てて

石木戸雅江

(評)日本百名山に名を連ねる「両神山」。山岳信仰の場としても有名な荒々しくも美しい山と聞いております。掲句はその両神山をいただいて暮らす秩父の日常がありありと伝わります。土深くまで育った牛蒡。穴を掘り下げ、尻を立ててしつかと牛蒡の頭を握ります。今から渾身の力を込めて引き抜く、その姿を両神山は見守ります。

花野行く児は毬まりになり鳥になり

榎本順江

(評)秋の草花が咲き乱れる「花野」。春の野の華やかさとは少し違い、爽やかな秋風に吹かれる草花にはどこか侘しさが漂います。一方、中七下五の語りには愉快的な躍動感があります。花野を行く児は毬のように軽々と弾み、鳥のように楽しげにさええずり、先を行きまです。見守りながらついて行くような視線が優しい一句です。

千円カットして敬老の日の顔となる

前原元一郎

(評)愉快かつ納得の描写に膝を打ちました。昨今よく目にする「千円カット」の店。手の込んだ美容ではなく、ほんの少し綺麗に身を整える、そんな日常のお店の印象です。文化の日に合わせて催される文化祭や芸術祭へ出かけるのでしょうか。普段よりも引き締まった理知的な「敬老の日の顔」をつるりと撫でます。